広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	安部公房『他人の顔』とジェンダー
Author(s)	景山，藍
Citation	論叢 国語教育学 , 16 : 25 - 35
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50700
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050700
Right	
Relation	

安部公房『他人の顔』とジェンダー

景山　藍

一　研究の目的

本研究の目的は、安部公房の小説『他人の顔』[1]を、ジェンダーという切り口から読み解くことである。

安部公房は、一九六〇年代以降、現代の都市を舞台にした失踪の物語を執筆した。『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』の三作品を安部は自ら「三部作」とし、「失踪前駆症状にある現代を書い」たと述べている[2]。「失踪三部作」は先行研究において、六〇年代の都市生活者が抱える不安や孤独、他者との関係の在り方の模索、農村社会に見られたような共同体意識からの脱却の可能性を描いたことが評価されてきた。例えば高山（一九七六）[3]は「共同体や家庭の思想」への反発が描かれていると指摘する。こういった読みは、作品の中心人物である男性の行動にフォーカスして行われてきた。本研究では、中心人物の在り方に読みを収束させるのではなく、中心人物として描かれる男性と、その妻の女性との二人の関係性に焦点を当てる。その際、社会的な性差であるジェンダー[4]という概念に着目することで新たな読みをひらいていく。結論を先取りすれば、その性別「らしく」振る舞うことへの社会からの要請・命令であるジェンダー規範こそが、二人の人間関係を困難にしている要因なのである。

本研究の対象は、小説『他人の顔』である。『他人の顔』は、『砂の女』（一九六二年）に続く「失踪三部作」の第二作目である。一九六四年一月号『群像』に掲載されたのち、加筆・改稿されて同年九月に単行本として刊行された。一九六八年には安部公房自身の脚本で、勅使河原宏監督により映画化されている。

本作の中心人物である「ぼく」は、職場（研究所）での科学実験中の事故により顔全体にケロイドができ、繃帯を巻き覆面で生活することになる。顔や表情を持たないことで人々と距離を感じ、孤独感を強めていった「ぼく」は、他人との関係を回復するため他人の代表だと考える妻（「おまえ」）との関係回復を求める。そして、そのために精巧な「仮面」を作成し、他人に成りすまして妻を誘惑する。妻は「仮面」の誘いに応じ、密通が果たされるが、「ぼく」は妻への不信感を強める。「ぼく」は手記をしたためて洗いざらい告白するが、それを読んだ妻は失踪する。なお、本作の記述のほとんどは「ぼく」の手記からなり、終盤には妻の手紙が挿入される。この手紙は、手記を読んだ妻が「ぼく」宛てに書き残したものである。

先行研究では太田（二〇一八）[5]が、「ぼく」と妻が事故以後ほとんど会話をしていなかったことで、妻の行動や態度は「「ぼく」の中で独りよがりに解釈されて」おり、それによって「〈他者〉の代表

と見なしていたはずの「おまえ」（論者注＝妻）こそが、実は最も〈他者〉性をないがしろにされた存在だった」ことを指摘している。妻の失踪を受けて、「ぼく」は真の〈他者〉と出会い、「ぼく」はようやく「〈他者〉と関わって生きていくという課題に切実に向き合うことになる」という。

しかし、「〈他者〉性をないがしろに」したという「ぼく」の至らなさを指摘することに留まれば、社会の側や妻側が抱えている問題や責任まで「ぼく」個人に背負わせることになるのではないか。また、妻を〈他者〉という概念に収束させることで、社会的な性差による問題が隠されてしまうのではないだろうか。よって本研究では、「ぼく」と妻の関係性に着目し、二人やその背後にある社会が抱え込んでいるジェンダー規範と、それによる影響を紐解いていく。そのことで、なぜ分かり合えなかったのか、その原因を説明し、妻と「ぼく」の間にあったはずの可能性について検討していく。

二　アイデンティティーの危機と性暴力

まず、顔を失った「ぼく」が自己の回復のために取った行動を、ジェンダーの視点から検討する。「ぼく」は「人間という存在のなかで、顔くらいがそれほど大きな比重を占めたりするはずがない」（三二九頁）と考えていた。しかし、癒しを求めてかけたレコードが狂って聴こえたことで、顔の傷によって自身に変化が生じたと感じる。「ぼく」は動揺し、発作的に妻に対して乱暴な行動を起こす。

つづいて起きたことは、自分にもよく後をたどれないほど、発作的な衝動だった。おまえの抵抗に出会ってみて、やっと自分の姿勢の意味が理解できたような始末だ。ぼくは、右手でおまえの肩をおさえ、左手をおまえのスカートの下に差込もうとしているのだった。おまえは、うめき声をあげると、いきなりばねのように膝をのばして跳上がった。椅子が倒れ、コップが一つ落ちて砕けた。

倒れた椅子をはさんで、ぼくたちは、息もつかずに立ちすくんでいた。たしかに、ぼくのやり方は、乱暴すぎたかもしれない。しかし、ぼくの方にだって、多少の言い分はあったのだ。顔の傷にさえぎられて、見失いかけているものを、一挙にとり返すための、せいいっぱいの試みだったのである。あの事故があって以来、ぼくたちは、ずっと関係を絶ったままだった。理屈の上では、顔に付随的な意味しか認めないようなことを言いながら、けっきょくは顔との対立を避けて、逃げまわっていたのかもしれない。しかし、ここまで追いつめられては、正面切って反撃に出るしかなかった。ぼくは、顔の格子が幻影にすぎないことを、その行為で立証してみるつもりだったらしいのだ。

（三三一頁）

「ぼく」は突発的に妻との性的接触を求め、妻が行為を受け入れてくれたならそのことが自身の変わらなさの証明になると考えた。しかし妻は抵抗した。その後、妻は泣きじゃくる。

「ぼく」は、顔に怪我を負ったことで自分自身の在り方が揺らぎはじめていることに気がつき、動揺している。自分で自分がわからなくなったために、他者である妻からの承認を求めている。しかし、その方法として、妻を合意なしに思うままにしようとする（しかも反射的に、無意識にする）ことで、「ぼく」は拒絶されている。この拒絶は、「ぼく」が変わってしまったことを示すのか否かという以前

に、妻からすると暴力であり脅威である。

この「ぼく」の行動を読み解くにあたって、デイビッド・フィンケルホーの論を参照する。フィンケルホーはアメリカの社会学者で、子ども、女性への暴力の調査研究を行っている人物である。森田（二〇一九）[6]によれば、彼は、性暴力は男性の社会化（male socialization）ジェンダー意識に起因していると論じ、次のように指摘している[7]。

> 女性との性関係を持つことが、男としてのアイデンティティーの確立に重要だという意識を持たされてきた。それゆえに男性は女性に比べて自己のアイデンティティーが危機におちいると性行為を通してそれを取り戻そうとする傾向がある。

「という意識を持たされてきた」の部分が重要である。フィンケルホーは、男性というジェンダーを持つ人々に対して、社会がどのような要請をしてきたのか、その要請を受け入れた男性がどのように自己を形成してきたのかについて指摘しているのである。

この指摘を「ぼく」の行動と照らし合わせると、「ぼく」は「自己のアイデンティティー」、さらに限定して言えば「男としてのアイデンティティー」が危機に陥り、妻という女性との「性行為を通してそれを取り戻そう」としたと考えられる。このような「ぼく」の思考には、「女性との性関係を持つことが、男としてのアイデンティティーの確立に重要だ」という、社会が男性に要請してきた価値観、すなわち男性の社会化におけるジェンダー規範が色濃く影響しているといえる。また、性的接触を求めたことそれ自体とは別に、その際の方法が「右手でおまえの肩をおさえ」るなど腕力で妻の行動を制限しようとした点、それが発作的である点についても指摘しておきたい。体格の差などによって、しようと思えば力で制圧、支配できてしまうということと、このような価値観が重なったことによる行動であり、また無意識に行ってしまう程この価値観が「ぼく」の中に浸透しているということなのである。

しかし、妻は反射的に避け、「ぼく」の行動を受け入れはしなかった。「ぼく」が内面化している「男としてのアイデンティティー」が性暴力という形をとって現れ、そのことで妻との関係が悪化しているのである。

また、この出来事について「ぼく」は後に次のように言及している。

> あれは、ぼくの方にも、というよりはむしろ、ぼくの方にこそ、咎められるべき点も多かったに違いない。歌の文句にもあるとおり、愛する者に、いつも愛される権利があるとは限っていないのだから。
>
> （三七九頁）

「ぼくの方こそ、咎められるべき点も多かったに違いない」という言葉からは、譲歩しつつも、拒んだ妻を咎める気持ちがあることがわかる。また、「愛する者に、いつも愛される権利があるとは限っていない」ということは、妻から拒まれたことを、そのとき「ぼく」が愛されていなかったからだと解釈しているとわかる。しかし実際のところ、愛されていなかったから拒まれたという解釈が正しいかは判断できない。妻が「ぼく」自身をではなく、「ぼく」の行動を拒んだ可能性もあるからだ。「ぼく」はその点には考えが及んでいない。

以上のように、この場面では「ぼく」のアイデンティティー回復の手段をめぐって「ぼく」と妻との関係に亀裂が生じている。その

背景に男性というジェンダーが持たされてきた規範があるといえる。

三　妻の好意と「ぼく」の疑心

次に、仮面を被った「ぼく」と妻との密通が行われた期間に着目し、「仮面」と妻の関係性を整理する。

「ぼく」は質感などにもこだわり時間をかけて精巧な仮面を完成させた。仮面の顔は怪我をする前の「ぼく」に似せるのではなく、まったくの他人に成りすませる顔を作った。「ぼく」は仮面を被って電車に乗る。繃帯を巻いていた時とは違い、誰からも避けられることなく乗ることができ、「ぼくはちゃんと仲間入りを許されている」（四一五頁）と感じる。他者に避けられない感覚を取り戻した仮面の「ぼく」は、「やっと食事制限を解かれた胃病患者よろしく」（四一五頁）妻の肉体を求めはじめる。また、混み合った電車で自分の体が女性の体に接触してしまったことに触れ、「ぼくの思考の、少なくとも七割までは、性的な妄想で占められつづけていた」（四一六頁）と手記に綴っている。「顔に蛭が巣くい始めて以来」（四一六頁）、「行動にこそ現わさなかったが、ぼくはまさに潜在的な、性犯罪者」（四一六頁）であったという。

そして、妻を求めるのはその痴漢的要素によってではなく、むしろ痴漢からの脱却の衝動なのだと「ぼく」は説明する（四一七頁）。また「ぼく」は、仮面を被って妻を誘惑するという行動が、「もっとも純粋な自由の消費」は「性欲」だという性欲観に導かれて行ったものだと考える（四三六頁）。さらに、「ぼく」自身が「仮面」の欲望に共感していたことを認めたうえで、「空腹や、渇きのように、性そのものに飢えていたわけではない」とし、「仮面がひかれていたのは、あくまでも、性の禁止を犯すこと」であるという（四四六頁）。

「ぼく」はこのように、妻に向けて書いた手記の中で、性的な欲望をさまざまに語る。痴漢は性暴力の一つであるが、森田（二〇一九）[8]は性暴力について、「加害者の抑えきれない生理的性衝動が引き起こす行動ではなく、他者を支配することへの心理的欲求行動」だと述べている。「誰かを貶めて自分の有力感を得たい、相手に強いという印象を与えたい、抑うつ気分を払拭したい、自分自身への怒りを発散させたい」という理由から起こる行動だという。「ぼく」の、「性そのものに飢えていたわけではな」いという主張とこの論は一致する。また、「ぼく」は、顔を失って以来、「精神的な性犯罪者」であったという。それは、森田の論を参照すれば、「他者を支配することへの心理的欲求」を持っているということであり、自分の抱える心理的な課題を、他者を支配することの快感で乗り越えたいということである。他者への支配が女性に向くこと、性的な行動による支配を志向することは、先に挙げたフィンケルホーの、男性の社会化において重要とされてきた「男としてのアイデンティティー」を保つための行動と関わっているだろう。

「ぼく」は「仮面」として妻と性的関係を結ぶことを求め、行動に移す。「仮面」をかぶった「ぼく」が帰宅途中の妻に声をかけたとき、妻は冗談に対してにこりともせず、「我を忘れたよう」に口許を凝視した（四五四頁）。

妻は「仮面」として振る舞う「ぼく」に道案内を頼まれ、ためらいながらもそれに応じる。「ぼく」はそのことにかえって切なくなり、「仮面」に対して「たぎるような嫌悪」と「憎しみ」を感じる（四五八頁）。一方、「仮面」は「ぼくの苦悩を吸収し、それを養分に変える能力を持っている」ようで、妻に対して「欲望の枝葉を繁らせて」いた（四五八頁）。つまり、「ぼく」と「仮面」は相いれない存

在になっていた。

「仮面」は妻にレストランでの食事を提案し、妻は抵抗なしに応じた。食事が終わり、食器が下げられ、「仮面」があせって会話を続けていたとき、次のようなことが起こる。

しびれを切らした仮面が、ひょいと足をのばして、自分の靴先を、おまえの踝のあたりに押しつけたのだ。見えないぐらいの動揺がおまえの表情をかすめた。視線が宙に固定した。眉間に陰が落ちて、唇がぴくりと震えた。だが、おまえは、じつに静かに、しだいに光をにじませていく夜明の空のような寛容さで、仮面の悪足掻きを包み込んでしまったのだった。

（四六二-四六三頁）

この記述では、妻の「寛容さ」、動揺はありながらも落着きはらった様子が強調される。その後、「仮面」と妻はホテルへと向かう。

ぼくは、いまだに、おまえのあの確信に満ちた密通の意味を、じゅうぶんには理解できたとは言えないようだ。いわゆる好色というのでもなさそうである。好色ならば、なにかもっと媚に類するものが目立ってもよかったはずだ。しかし、おまえは、終始まるで儀式でも行っているように、ひたすら真剣さを失わなかった。ぼくにはよく分らない。おまえの中で、どんなことが起きていたのか、ぼくにはその跡をたどってみることが出来ないのだ。しかも、悪いことには、そのとき植えつけられた敗北感が、ついに最後まで……すくなくも、これを書いている現在まで……消えない染になって残ってしまったのである。この自虐の内攻は、嫉妬の発作よりも恐ろしい。せっかく仮面をつけて、通路を開き、おまえを招き入れたつもりだったのに、おまえはぼくを通り越して、さっさと何処かへ行ってしまった。そしてぼくは、仮面をつける前と同様、孤独のままで取り残されてしまったのだ。

（四六五-四六六頁）

「ぼく」は、仮面をつけて妻との密通を成功させたが、そのことでかえって妻のことが捉えられなくなってしまう。妻との間の通路回復は叶わず、孤独感を感じたままであった。「ぼく」は、「真剣さを失わな」い妻のふるまいの意味を理解できない。

一方、妻は真剣であった上に、翌朝ためらいがちに手作りのボタンを「仮面」に手渡す。それは「ぼく」には見覚えのあるボタンで、妻が「半月もかけて、いじりまわしていたやつ」（四六六頁）であった。時間をかけて作ったボタンを渡すという妻の行動は、「仮面」への何らかの好意を示すものだといえる。

「ぼく」が一週間ぶりに妻のいる家に帰宅すると、「おまえは、まるっきり疚しさの影さえ見せず、動作や表情の隅々にまで、ちゃんと一週間ぶりの微笑をたたえ」（四七〇頁）ており、その屈託のなさにぼくは呆然とする。妻に留守中の報告を促すと、妻は顔色一つ変えずに、世帯じみた話題（「近所の家で建蔽率違反の増築をはじめたのがきっかけで、互いに投書合戦が流行しはじめ」（四七一頁）たこと）を喋りつづける。「ぼく」は、妻の変化のなさに呆然としたが、実際のところ妻の行動には変化があったといえる[9]。以前の二人は「ありふれた噂話も、日常的なやりとりも絶えて」（三七九頁）いた。妻が「世帯じみた話題」を「ぼく」に話したことからは、「仮面」と過ごしたことを経て妻の心情に変化があったことが伺える。

動揺しない妻の様子を見て、「ぼく」は不安になり、仮面をかぶった状態でなら触覚的に感じることができた妻の実在感を求める。急ぎの仕事を口実に家を出て、「仮面」として妻に電話を掛ける。

「彼……戻りましたか？」

「ええ、でも、すぐにまた、仕事だとか言って……」

「あなたが、出てくれてよかった。彼が出たら、すぐに、切るつもりだったんだ……」

自分の無謀さの、辻褄を合わせるくらいの、軽い気持で言ったことだったが、おまえはしばらく、黙り込み、それから細い声でこう言った。

「可哀そうですわ……」

その言葉は、ぽとりとぼくのなかに落ちこみ、純粋なアルコールのように素早く全身にしみわたった。考えてみると、これはおまえの「彼」に関する始めての感想らしいものだった。

（四七二頁）

「ぼく」は、この時点では、「ぼく」と「仮面」が同一人物であることを妻は知らないと考えている。そのため、妻の「可哀そうですわ……」という言葉は、〝浮気されている「ぼく」が可哀そうだ〟という意味だと捉えているはずである。それは一義的には哀れみであるはずだが、「ぼく」のことを気に掛けているという意味ではいたわりとも捉えられる。アルコールが全身にしみわたるという比喩表現は、飲酒によって心地良い酔いが回った状態を想起させる。「ぼく」は、妻の「可哀そう」という言葉によって、束の間の安らぎを得たのではないか。

一方、妻は、後に手紙で明らかになることだが、この時すでに「ぼく」と「仮面」が同一人物であることに気づいている。そのことに鑑みると、妻のこの言葉は〝仮面を使わなくては、妻と心を通わせることができない「ぼく」が可哀そうだ〟ということを意味する可能性が出てくる。だとすると、「可哀そう」という言葉はいたわりでもありえるが、一方で他人事のようでもある。ここには、「可哀そう」な状況である夫に対して、その状況から脱するための働きかけをしようという意識は見られない。

以上のように、「仮面」と妻との密通期においては、「ぼく」の心は「仮面」と乖離していき、「仮面」の行動に嫉妬するようになってしまう。仮面を使って妻と性交することで、妻との交流を得、孤独感をなくそうという試みであったにもかかわらず、自ら三角関係を生み出してしまった形になっている。一方妻は、「仮面」に対して、わずかに動揺しながらも寛容な態度をとり、「仮面」との密会を受け入れてゆく。半月もかけて手作りしたボタンを「仮面」に手渡すことからは、誘惑してきた「仮面」に対する感謝や好意を示そうとしていることが読み取れる。妻が「ぼく」と「仮面」が同一人物だと知っていたと考えると、妻の「仮面」への好意的な対応は「ぼく」に向けた行為でもあったということになる。しかし、そのことはこの場面の「ぼく」は知る由もない。密通期においては、妻は「仮面」へ、また仮面の奥の「ぼく」への好意的な感情が高まっていくが、「ぼく」は妻への不信感と、元は自分自身であったはずの「仮面」への嫉妬心により孤独感を強めていくこととなる。

「ぼく」は痴漢的欲望からの脱却として妻との性的接触を求めるが、それは対象を不特定の他者から妻へと変えただけともいえる。また、他者を支配したいという気持ちの表れとしても読み取れる。

しかし妻は「仮面」の行動に対して好意的で、「ぼく」に対しての行動も変化し少し心を開くようになった。そんな妻のことを「ぼく」は理解できず、「ぼく」の不信感と孤独は深まる。このように「仮面」との密会の場面では、二人の相手への思いや理解はすれ違う。

四　「される」側としての特権意識

続いては、「ぼく」が妻宛てに書いた手記が完成し、妻に読ませ、それを読んだ妻が書き置きを残して失踪するという作品終盤の場面に着目する。

三で扱った場面ののち、妻と「仮面」は二度目の密通を行うことになるが、「ぼく」はその後にこの手記を書くことを決める。「仮面はすでに、おまえ（論者注：妻）を取戻すための手段ではなく、おまえの裏切りをたしかめるための、隠しカメラでしかなくなっていた」（四七五頁）のである。そして、手記を書き終えると、仮面作成を行っていたアパートに妻を招き、一人で手記を読ませた。「ぼく」は、手記を読んだ妻は家に帰ってくると思っていたが、妻は失踪する。次に、アパートに残されていた妻の手紙の一部を引用する。

妻は、「仮面」が「ぼく」と同一人物であると見抜いていたといい、「仮面」からの誘いについて次のように書いている。

もちろんわたしは、うろたえ、迷い、どうてんしてしまいました。なにぶん、ふだんのあなたからは、想像もつかない、思い切ったやり方でしたものね。でも、あなたの自信たっぷりな様子を見ているうちに、私はつい錯覚してしまっていたのでした。あなただって、私に見抜かれてしまっていることくらい、百も承知にちがいない。承知の上で、黙って芝居をつづけようと、催促しているのだ。最初は、とても恐ろしいことのように思いましたが、すぐに気をとりなおし、これは私に対するいたわりなのかもしれないと考えてみたのです。すると、あなたのしていることが、すこし照れ臭がっているようだけど、とても繊細で、やさしい、ダンスの申し込みのように思われはじめたのでした。それに、あなたが、びっくりするほど真面目くさって、騙されたふりをつづけるのを見ているうちに、私の心は、ますます感謝の気持ちでいっぱいになりはじめ、ですから、あんなふうに、素直にあなたの後をついて行く気にもなれたわけです。

（四八四頁）

妻は、「ぼく」の仮面劇を、妻へのいたわりだと解釈していた。それはつまり、「ぼく」は怪我をしたことで自分を見失いそうになっており、そのせいで素顔では妻に優しく接する余裕を持てなくなっていたが、別人を演じることでなら、素顔の「ぼく」が抱える葛藤を気にすることなく、余裕を持って他者へのいたわりを表現できるようになったのだという解釈だろう。

でも、あなたは、何から何まで、思い違いをしていましたね。あなたは、私が拒んだように書いていますが、それは嘘です。あなたは、自分で自分を拒んでいたのではありませんか。その、自分を拒みたい気持は、私にも分るような気がしました。こうなった以上は、苦しみを共にするしかないのだと、私も半ば以上はあきらめてしまっていたのです。だからこそ、あなたの仮面が、私にはとても嬉しく思われたのでした。私は、幸福な気持で、こんなことさえ考えていたものです。愛というものは、

互いに仮面を剥がしっこすることで、そのためにも、愛する者のために、仮面をかぶる努力をしなければならないのだと。仮面がなければ、それを剥がすたのしみもないわけですからね。お分りでしょうか、この意味が。

（四八四頁）

妻は、妻が「ぼく」を拒んだのではなく「ぼく」が「ぼく」自身を受け入れられていないのだと指摘する。そして、「自分を拒みたい気持ち」に共感を示し、「苦しみを共にするしかないのだと、私も半ば以上はあきらめてしまっていた」という。妻のいう「仮面」とは、相手のためを思って作る自らの振る舞いであり、「仮面を剥がしっこする」とは、相手が自分を労わった行動をしてくれた、ということに気づくことや、相手を労わることでかかっている負担に気づいてあげること、それを双方向に行うことだろうか。これは、この妻のような論理を重視する人にとっては、他者を思いやった確かなかたわりであるだろう。

しかし、「自分を拒みたい気持ち」に共感し、「苦しみを共にするしかない」とあきらめることは、一方では「ぼく」を拒んだことになるのではないか。それはつまり、「ぼく」が怪我をし、元の顔を失った（＝障害を持つことになった）ことを、「ぼく」自身も、妻も受け入れられないままでいたといえる。「ぼく」が障害を持った自分を「拒みたい」気持ちになり、妻もその気持ちに共感したところで二人とも停止してしまったといえるだろう。確かに、変化した自分を拒む気持ちを持つことや、その気持ちを持ったままでいることは、他者から非難されるべきことではないだろう。当人がそのように思うならば、その思いを持つことは誰に阻害されるべきものではない。しかし同時に、「自分を拒みたい気持ち」を持ちつづけることは、当人にとって苦痛でもある。その気持ちを和らげるために「ぼく」は行動を起こしてきたともいえよう。その結果辿り着いたのが、仮面を使って妻と密通するという方法であった。その試み、選んだ方法が功を奏すものであったのかどうか。仮面の機能に関しては一考の余地がある。妻は「愛する者のために、仮面をかぶる努力をしなければならない」という言葉で相手を思いやる努力の必要性を問いているが、ここでいう仮面は、思いやりを伝えるための補助的ツールであることに加えて、障害を覆い隠し、なかったことにする、障害を持たなかったころに回帰したい（してほしい）という欲望を叶えるという機能も持っているのである。仮面を喜ぶ妻は、自分への配慮を喜ぶと同時に、障害という要素を取り除いた「ぼく」を喜んでいるのではないか。

妻の言うように、他者との関わりにおいて相手への気遣いは重要である。だが、妻がこの状況で「ぼく」にいたわりを求めることは妥当であっただろうか。「ぼく」は怪我で顔を失い、そのことで他者との関係構築が困難になっている。夫が負傷したことで、妻も厳しい状況にあることは確かだが、今一番困難に直面していて、心に痛手を負っている人物は「ぼく」であるだろう。よって、まず一番にいたわりを受けるべきは「ぼく」である。そのように考えると、妻が「ぼく」からのいたわりを期待し、それがなされていなかったことに絶望して失踪するのは場違いではないか。

そこで問題になるのは、妻は「ぼく」をいたわっていたのか、という点である。「ぼく」から見た妻は、次のようであった。

ぼくらの間に、あのこわれた楽器のような沈黙が支配するようになってから、もうどれくらいになるだろう。ありふれた噂

話も、日常的なやりとりも絶えてなく、あるのはせいぜい、記号のような必要最小限の初等会話術ばかり。だが、その点についてだって、おまえを責めようなどとは思わない。それもまた、おまえのいたわりの一部であることくらい、じゅうぶんに心得ているつもりだ。こわれた楽器は、かえって騒音をたてやすい。そっと沈黙させておくにこしたことはないのだ。（三七九頁）

「ぼく」は、会話がないことも妻のいたわりの一部だと理解しているつもりであった。それは、余計な刺激を与えずそっとしておくという形でのいたわりだろう。また、「ぼく」は妻の行動を「沈黙に、不自然さを与えまいとして」（三八〇頁）動いていると解釈した。「沈黙にうちかとうと、せめて腹をたてたふりでもしてみようと思う」（三八〇頁）が、妻の努力を見て萎縮する。

結論としては、妻は「ぼく」の身の回りの世話を淀みなくこなしていた。「ぼく」はそれを「妻のいたわりの一部」だと理解していたが、それで満足したわけではなく、「沈黙にうちかとう」という思いも抱いていた。

「ぼく」のいうように、妻の行動は「ぼく」へのいたわりによるものだろう。しかしそれと同時に、触らぬ神に祟りなしというような、一見相手を配慮しているようで、刺激を与えて面倒事になることを避けているような、そんな対応であったともいえるだろう。

妻がそのような対応を取った理由は何であろうか。面倒事を避けようとしたと仮定するならば、何が面倒で、なぜ避けたいのか。その理由として、自分は相手に対して積極的なアクションを起こしたくない、起こさねばならぬ責任はない、もしくは起こす権利がない、という考えがあったのではないだろうか。

具体的に言うならば、夫婦関係において妻は、夫の弱さや不安を真向から眼差し受け止めるということや、夫の思いや考えを変化させうる働きかけを行う、ということをなすべき立場ではないという考えがあり、妻はそのような考えを内面化していたからこそ、傷ついた夫との対話を避けたのではないか。そのような考えによって臨機応変な行動を制限されたともいえるし、面倒な行動をしなくていいという後ろ盾に利用したともいえるだろう。ここでいう「そのような考え」の一部に、ジェンダー規範があるのではないだろうか。ジェンダーが生み出す「女らしさ」には、例えば「政治にはあまり参加せず、優しい言葉遣いをし、しとやかな行動がその価値を高める」[10]といったものが挙げられるが、本作の妻はこういった性別に付随して要請される行動様式の影響下にあるといえるだろう。

また、妻の「ぼく」へのこのような消極的対応は、次のような会話の場面でも見られた。映画を見に行ったことを妻に伝える会話では、「ぼく」が吐露した感情を受け止めようとせず、当たり障りのない話題に移行しようとする妻の様子が見て取れる。

「今日、ぼくは映画を見て来たよ。」

おまえ（論者注：妻）は、用心深さをさとられないほどの、用心深さで、ぼくの繃帯の割目をのぞきこみながら、次の言葉を待っている。

「いや、映画が見たかったわけじゃない。本当は暗闇がほしかったんだ。こんな顔で街を歩いているのが、急に悪いことをしているみたいな、負い目に感じられはじめてね。妙なものだな、顔なんて……あるときには何んとも思わなかったのに、無くなってみると、世界が半分むしり取られてしまったような気がす

る……」
「どんな映画だったの？」
「おぼえていない。なにぶん泡をくっていたからね。本当に、いきなり強迫観念におそわれたんだ。ぼくは、まるで雨宿りでもするみたいに、近くの映画館に駆け込んで……」
「どの辺の映画館？」
「どこだって同じことだよ。ぼくは暗がりがほしかったんだ。」
おまえは咎めるように、唇のまわりに力を込めた。しかし両眼は、ぼくだけを責めているのではないことを示そうとして、悲しげに細められている。ぼくは激しい後悔におそわれた。こんなはずではなかったのだ。ぼくはもっと違った話をするつもりだったのだ。
（三八二頁）

この、咎める気持ちを言葉には出さない妻や、妻の意図を無視して会話を進行する「ぼく」の様子からは、主張を声に出して押し通す権利を持つ「ぼく」と、その権利を持たず主張できないと同時に、権利が保障されていない範囲については請け負う義務はないとばかりに口を閉ざす妻という関係性が見出される。それは、二人の個人的な性質と理解することが可能であると同時に、二人の周りに通底する「夫」観と「妻」観に影響を受けたものと解することもまた可能である。

このように、妻は「ぼく」を十分に思いやることや、「ぼく」の弱さに向き合うことをしていない（一方、関係性によってできていないともいえ、その点は「ぼく」側にも責任がある）。そうでありながら、自分はいたわりを受ける存在であると思っている。このような、自分はいたわられる側だという意識からは、社会の中で「女らしさ」だとされてきた規範の範囲内で行動している妻の、特権意識という側面が指摘できる。

五　おわりに

本研究の目的は、ジェンダーという概念に着目することで『他人の顔』の新しい読みをひらくことであった。本作の中心人物として描かれる男性と、その妻の女性との二人の関係性に焦点を当て、「ぼく」と妻との関係修復が果たされなかった理由を考察した。本研究の成果として、その性別「らしく」振る舞うことへの社会からの要請・命令であるジェンダー規範に則った行動をすることが、二人の人間関係を困難にしている要因の一つとして見出された。

一で扱った「ぼく」のアイデンティティー回復の手段をめぐっては、「ぼく」の行動の背後に、男性というジェンダーが持たされてきた規範があった。二の「仮面」と妻が交流する場面では、「ぼく」の動機としては「ぼく」の自己回復のために妻を利用しようとした一の場面と変わらないものであったが、妻の受け取り方は異なっていた。三で扱った妻の手紙では、二の場面での妻の解釈違いを妻が自覚している。他者へのいたわりに関する妻の見解は筋の通ったもので、「ぼく」が自己の回復のために動いていることに対して、妻は他者への思いやりを持つことの重要性を説いていた。その一方で、従来の顔を失うという精神的にも苦痛の大きい出来事を経験した「ぼく」に対して、妻へのいたわりを強く求めることの妥当性や、妻から「ぼく」へのいたわりの不十分さや方法の妥当性について指摘した。そしてそのことが、夫への積極的な働きかけをすべきでないという妻像や、いたわられる側だという妻、女性の認識の問題によるものなのではないかと指摘した。また、妻のいう、「ぼく」から妻へ

のいたわりのなさについても、一で指摘したような「ぼく」が抱えるジェンダー規範、女性への抑圧的な発想がその原因の一つとしてあると考えることもできるだろう。

一方で、残された解釈の余地として、ジェンダー規範に則った不均衡なジェンダー認識が解消されたなら二人の不和は解決したのか、と考えると、それだけでは不十分だと考えられる。すなわち、ジェンダー規範は理由の一つであって、二人の不和は他の理由とジェンダー規範が重なり合って生まれたものだろう。他の理由を考える際に、まずは妻が指摘したような、利己的な行動をする「ぼく」の発想と利他的な行動を重視する妻の発想とのずれに関するものである。また他の理由としては、障害を持つということと、それを受入れること、障害を持つ以前の姿にこだわることといった、障害に関することがあるだろう。これらの点に関して考察を深めることで、本研究の成果が生かされることとなり、作品の新たな解釈が生まれるだろう。今後の課題としたい。

なお本研究では、『他人の顔』内に流れるジェンダー規範に関する指摘を行い、それによって登場人物の行動を解釈したが、安部公房自身がジェンダー規範に関して強い問題意識を持っていたのかどうかということについては、判断しかねる。さらにいえば、本研究ではそのような作家自身の意図は問題にしていない。しかしながら、どうであれ、本作を読む上でジェンダー規範に着目することは作品の理解を広げ、深める。安部の意図に関わらず、本作はそのように読んでも読みうる強度を持っていると論者は考えている。

注

1 『他人の顔』の引用は全て『安部公房全集18』（新潮社、一九九九年三月）に拠った。

2 「私の文学を語る　秋山駿［インタビュー］」（一九六八年三月）『安部公房全集22』新潮社、一九九九年七月。

3 高山鉄男「安部公房における空間」『特集　小説の空間 FOREIGN LITERATURE④』朝日新聞社、一九七六年六月。

4 土田ら（一九九六）では、ジェンダーについて次のように述べられている。「われわれは、確かに、生物学的性によって与えられた人生を生きているかのような錯覚を持っている。しかしながら、われわれの行なう行為とは、すべからく、社会・文化的に構成された行為である。心の奥底からわき上がる「男として」の、「女として」の、自然でリアルな情感は、決して生物学的性からくるものではなく、権力作用の社会過程のなかで無意識のうちに構成されたものなのだ。」（「ジェンダー的読みを解き明かす　われわれはジェンダーに呪われている……」土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論テクスト・読み・世界』新曜社、一九九六年、一一五頁。）

5 太田草子「安部公房研究――「他人の顔」「箱男」における自己と他者――」『日本文學114』二〇一八年、一〇三-一二三頁。

6 森田ゆり『体罰と戦争　人類のふたつの不名誉な伝統』かもがわ出版、二〇一九年、一四一-一四二頁。

7 森田ゆり編『沈黙をやぶって　子ども時代に性暴力を受けた女性たちの証言＋心を癒す教本』（一九九二年、築地書館、二三一-二三二頁）に、フィンケルホーの論文（David Finkelhor, Child Sexual Abuse, Free Press,1984.）の訳が一部掲載されている。その訳を参照した。

8 注6に同じ、一三八-一三九頁。

9 妻の変化については、波潟（一九九六）でも次のように指摘されている。「この時期の「ぼく」はその（論者注：妻の対応が変化した）理由を明らかにすることが出来ていない。それは、「ぼく」が「彼」（論者注：「仮面」）であるとき、後に手記によって告白されずともそれが「ぼく」であることに気づいている「おまえ」と、うまくだましていると考えている「ぼく」との相違から生じている」（波潟剛「安部公房の『他人の顔』論――文章構成の形態とテーマをめぐって――」筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集13』、一二六-一〇六頁、一九九六年。）

10 注4の引用文献に同じ、一一二頁。

（広島県立大門高等学校）